

## 概要

日時:2014年1月19日(日)13:00-16:00

場所:浦添市てだこホール 市民交流室

共催:沖縄県地域統括相談支援センター, 国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部

後援:琉球大学医学部附属病院がんセンター, 沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会

定員:50名

参加費:無料

プログラム:

【13:00】開会あいさつ:増田 昌人(沖縄県地域統括相談支援センター センター長)

【13:05-14:00】高橋 都(国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部長)

「がんになっても働きたい! ~両立のために自分・職場・医療者ができること」

【14:00-14:10】休憩

【14:10-14:40】沖縄県における働くがん患者の現状

- ・安里 香代子(沖縄県がん患者会連合会 事務局長)
- ・阿部 義則(沖縄県福祉保健部医務課 課長)
- ・狩野 誠(沖縄県商工労働部雇用政策課雇用企画班 班長)
- ・國代 尚章(沖縄労働局職業安定部 部長)
- ・仲田 秀光(那覇商工会議所 専務理事)
- ・川満 光行(沖縄県商工会連合会 専務理事)
- ・宮里 泰邦(日本労働組合総連合会沖縄県連合会(連合沖縄) 副事務局長)
- ・石郷岡 美穂(琉球大学医学部附属病院 医療福祉支援センター・シエント 医療ソーシャルワーカー)
- ・青木 一雄(琉球大学大学院医学研究科 衛生学公衆衛生学講座 教授)

【14:40-15:30】カフェタイム:お茶をしながら、仕事や日常生活のことをみんなで話そう

【15:30-16:00】全体発表

【16:00】閉会あいさつ:樋口 美智子(沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会 部会長)

## 報告

1月といっても温かい沖縄県。記念すべき第1回ご当地カフェは、那覇のお隣、浦添市の「てだこホール」市民交流室で始まりました。共催の沖縄県地域統括相談支援センタースタッフの皆さまのご尽力のおかげで、準備万端。会場には患者さんやご家族向けの資料が置かれ、患者会コーナーも設けられました。



沖縄県地域統括相談支援センター 増田 昌人センター長の「ようこそ!」という挨拶でスタート。

まず高橋都部長(国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部)が「がんになっても働きたい! ~両立のために自分・職場・医療者ができること」というタイトルで講演しました。

仕事の意味について聴衆に手を挙げてもらおうと、「収入の糧」ではほとんどの手が挙がりますが、「自分のアイデンティティ」、「社会に貢献する方法」などでも手が挙がりました。仕事には、単にお金を稼ぐ以上の意味があることがわかります。講演では、がん治療と仕事の



増田 昌人センター長



高橋都部長

両立に向けて、治療を受けるご本人、職場関係者、医療関係者がそれぞれ直面する問題が提示されるとともに、最終的に目指すべき方向性、この数年で増えてきた患者に向けた書籍や情報冊子、ウェブサイトなどが紹介されました。



講演後の休憩では、地元の喫茶店が会場の一角に無料出店。淹れたてのコーヒーの良い香りがたち、参加者からも笑顔がこぼれました。

休憩をはさんだ第2部では、さまざまな立場の方から、沖縄県における働くがん患者の現状について発表がありました。この第2部が「沖縄カフェ」の最大の特徴。行政、企業関係者、労働組合、患者団体、医療者という異なる立場の方々が、「がんと仕事」について話し合うために一堂に会したのは画期的なことでした。関係者が並んだ姿は壮観でした。



沖縄県がん患者会連合会の安里香代子事務局長からは、がん患者さんのユンタク(おしゃべり)で「金の切れめは命の切れめ」という言葉がしばしば出てくること、そして沖縄県がん患者会連合会のアンケートの中では30代から50代の患者の3分の1が「仕事をしたいけれどがんということ話す」と仕事に就けない」と答えている厳しい現状が報告されました。その一方、働くことで心のゆとりを取り戻す方が多いこと、家族の就労も課題であることを指摘されました。働く患者が増えることは県の納税者を増やすことでもあり、今後、連合会でも患者さんが働く窓口をつくるための連携をひろげたい、と話されました。

沖縄県福祉保健部医務課 阿部義則課長からは、医務課で担当している施策についてご説明いただきました。また、ご自身が薬剤師として勤務していた当時のがんイメージとは異なり、現在のがんの生存率が高くなっていることに触れられ、今後がん患者さんの生活の質をどう高めていくかの重要性を指摘されました。

沖縄県商工労働部雇用政策課雇用企画班 狩野誠班長からは、県だけではなく、市町村の窓口の情報共有や連携を強化し、更に医療機関、NPO法人、社会福祉団体などとの横の連携も深めていくこと、そして、がん患者さんへの企業側の偏見や差別への対策という2つの課題があることが指摘されました。また、沖縄県の労働環境や雇用環境が非常に厳しい状況にあり、完全失業率は国内で一番高いことや、離職率の高さ、などについて話されました。このようなことへの対応として、平成24年からはじまった「グッドジョブセンターおきなわ」についてご紹介頂きました。



安里香代子事務局長



阿部義則課長



狩野誠班長

沖縄労働局職業安定部 國代尚章部長からは、沖縄労働局ではハローワークにおける職業紹介、助成金の活用を通じた雇用対策、労働基準監督官による指導監督、職場の安全衛生の確保など、労働に関する様々な施策が行われていることが紹介されました。就労は、単に生計面だけではなく自己実現や生きがいにもつながるものであり、生活の質を高めるといっても必要性に応じた就労支援が重要であることを話されました。そして、労働局とがん診療拠点病院と連携した事業展開も検討したいこと、就労に関して困っている点や不安な点があれば、ぜひ労働局ハローワークに相談してほしいということも話されました。

那覇商工会議所 仲田秀光専務理事からは、身近な方ががんとの関わりから感じたこととして、社会の理解が必要であることを指摘されました。そして、商工会議所と商工会の担当業務についてお話があり、今後、商工会議所ができる関わりとして、社会保険労務士と連携の可能性も指摘なさいました。

沖縄県商工会連合会 川満光行専務理事は、今日のご当地カフェに参加して、人間には、もしがんに罹った後でも、それを乗り越えようという本能的なものがあると感じたと話されました。がん患者さん本人だけでなく、家族、行政、医療、企業など社会全般の関わりがある問題なので、それぞれの立場から取組みを強めていく必要性を指摘。そして、事業主への講演会の実施や、商工会連合会でやっているエキスパートバンク制度（経営、税務、融資、労務などのエキスパートを直接事業所に派遣して問題解決をしていく制度）を活用することができるかどうか検討してみたいと話されました。



國代尚章部長



仲田秀光専務理事



川満光行専務理事

日本労働組合総連合会沖縄県連合会（連合沖縄） 宮里泰邦副事務局長は、がんは今や慢性疾患であり、働きながら治療することが可能だと理解することが重要だと話されました。また、会社には労働者の安全と健康に配慮する義務があるということがなかなか知られていないこと、働く人にやさしい会社づくりをしていかなければいけないこと、外見からは症状がわかりにくい患者さんもいることから会社や同僚の接しかたが重要だと指摘されました。そして、会社と経営者が、就労しているがん患者さんと真剣に向き合っていくためにも、会社とご本人との間の相談や、家族との関係、病院との関係など、様々な問題点を多くの人が理解することが第一歩と思うと話されました。

琉球大学医学部附属病院 医療福祉支援センター・シエント 医療ソーシャルワーカー 石郷岡美穂氏は、医療ソーシャルワーカーとして相談を受けるとともに、がん患者さんが医師から告知を受ける際に立ち会ってサポートをしていること、相談の中では就労に関することはわずかであることなどを報告されました。そして、「仕事を辞めるべきかどうか」という相談には、とにかく辞めないようにと伝えていること、職場の方からの問い合わせや入院中のがん患者さんからの相談を受けると、会社側とご本人とが直接話し合うことの難しさを感じていると話されました。また、がん罹患によって休職、離職、失職をする人が多い中で、一時的な経済的に苦しい時期を支える制度の必要性を指摘されました。

琉球大学大学院医学研究科衛生学公衆衛生学講座 青木一雄教授からは、がん患者さんの生活の質を考えると「就労」は欠かせない問題であり、それぞれの病状・状態に応じて働ける機会を作らなければならないことが指摘されました。また、産業医としての勤務の際、人事労務担当の方などから「がん患者さんへの配慮」について聞かれたら「特別視しなくてもいいですが、配慮は必要です」と伝えていること、ただし病状・病態に応じた配慮と本人ができる仕事を「がんだから」やらせないといった偏見や差別とは切り分けて考えてほしいことを話されました。そして、がん患者さんを取り巻くいろいろな立場の人たちが横の連携をとることの必要性を指摘されました。



宮里泰邦副事務局長



石郷岡美穂氏



青木一雄教授

カフェタイムでは、参加者は6-8人の小グループに分かれて、がん診断後の仕事や日常生活についてお茶を片手に自由に語り合いました。第2部のスピーカーもグループに参加したので、発表の内容についてざっくばらんに質問したり、話し足りなかったことを追加したりする光景も見られました。全体発表では小グループごとに話し合った内容を全体に向けて発表。会社側と労働者側のコミュニケーション、金銭的問題、中小企業の苦勞、診療時間の延長の必要性など、さまざまな切り口から

話し合いがあったことが報告されました。さらに就労の話題にとどまらず、告知の問題や子どもへがん教育のトピックも出たということでした。



最後に沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会 樋口美智子部会長からは、ご当地カフェ沖縄が「大変記念すべき、歴史に残るイベント」であったとのコメントをいただき、今回得られたヒントやアイデアを持ち帰り、今後のがん患者さんへの就労支援のために役立ててほしいという挨拶がありました。



樋口美智子部会長

今回のカフェが、さまざまな立場の方々の出会いと気づきの場になったことが何よりの成果だったと思います。カフェタイムの話し合いの中で、「立場がちがうと時々対決姿勢になることがあるけれど、それはだめだめ。支援する人・される人の立場をこえて、みんなでやっていかないと。」「沖縄県の完全失業率は高いけれど、県民が元気なのは横の連携と支えがあるから。」という声が出たのが印象的でした。多方面の方々に声をかけてくださった沖縄県地域統括相談支援センターの皆さまのご尽力に、心から感謝申し上げます。このご縁の輪を、ぜひ、広げてまいりましょう。

## 当日の参加者アンケート抜粋

### ■ 診断を受けたご本人から

- ・ こういうような話し合い、支援があることで心の支えになるので助かります。
- ・ これから再就職しようと思っていたところだったのでいろいろな情報が得られてよかったです。世の中いろいろな意味で動き出しているんだなと思いました。参加して良かったです。
- ・ 参加して良かったです。いろんな立場の方々と交流できたことで、やはり悩みや幸せはみんなで共有していくことはとても大切です。
- ・ 「がん患者就労支援の登壇者たち」の中で「職場」の人達にがんについて理解してもらうことがとても大事だと感じた。今日のように患者・医療者・職場(事業主・企業)の三者が交流を持つという場ははじめてだったがとても素晴らしい。

### ■ 医療者から

- ・ 参加できてとても良かったと思います。多職種と、また、患者と関わることでいろいろと情報を得ることが出来ました。
- ・ 沖縄県の良さ”みんなで連携”頑張りましょう。
- ・ いろいろな立場からのお話を聞くことで、それぞれの思いや提案を聞くことが出来大変勉強になった。
- ・ 今回のように県、行政の参加が望ましい。

### ■ 企業関係者から

- ・ がん治療においては通院治療への企業や職場の人の理解が必要だと思いました。現実では、まだ病気を他の人が理解していないことが多く、この様な不安を解消するための方法は各企業や病院でのアドバイスはどうなっているのか知りたいです。
- ・ 啓発・普及の必要性を感じた。今後も継続して実施していただきたい

(文責 高橋 都)

■新聞広告

沖縄タイムス

おれんじ村1月9日(木)掲載

**イベント開催**  
**ご当地カフェ in 沖縄**  
 ～がんになったあとの暮らしを学ぶ・語るイベント～  
 【ご当地カフェとは】がんになったあとの暮らしについて学び、語り合う学習イベントです。お茶を飲みながら講演を聞き、抱えている問題をみんなでざっくばらんに話し合いませんか？  
**講演「がんになっても働きたい!」**  
 ～両立のために自分・職場・医療者ができること～  
 講師：高橋 都  
 (国立がん研究センターがん対策情報センター・がんサバイバーシップ支援研究部長)  
 日時：2014年1月19日(日) 13:00～16:00 (12:00開場)  
 場所：浦添市でだこホール 市民交流室 定員50名  
 参加費：無料 (お茶・お菓子合)  
 申込：098-942-3407 (直通)

琉球新報

ちよbit1月16日(木)掲載

**講座・勉強会**  
**講演会**  
 ～がんになったあとの暮らしを学ぶ・語る～  
 ご当地カフェ in 沖縄開催のご案内  
 ご当地カフェとは、がんになったあとの暮らしについて学び、語り合う学習イベントです。  
 がん患者の抱える悩みは多岐に渡り、特に経済的問題は治療に影響することもあり、働く世代のがん対策の充実が叫ばれています。ぜひこの機会にお茶を飲みながら講演を聞き、治療と仕事の両立について、またがんになった後の日常生活について話し合いませんか？  
 講師：高橋都先生(国立がん研究センターがん対策情報センターががんサバイバーシップ支援研究部長)  
**「がんになっても働きたい!」**～両立のために自分・職場・医療者ができること～  
 日時：2014年1月19日(日) 13:00～16:00(12:00開場)  
 場所：浦添市でだこホール市民交流室  
 定員：50名(参加申込不要)  
 対象：一般市民(特にかん体験者やご家族、医療者や職場の方、その他関心のある方などなでも)  
 参加費：無料(お茶・お菓子合)  
 お問い合わせは  
 沖縄県地域統括相談支援センター  
 担当：梶原 香098-942-3407(直通)又は098-895-1368 FAX:098-942-3408

■新聞記事

沖縄タイムス1月16日(木)掲載

**がん患者の就労考える 19日 浦添でだこホール**  
 がん患者の就労について現状や課題を学ぶ「ご当地カフェ・イン沖縄」(主催・県地域統括相談支援センター、国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部)が19日午後1時、浦添市でだこホール市民交流室である。国立がん研究センターの高橋都さんが「がんになっても働きたい!」をテーマに講演。参加者が、お茶を飲みながら仕事や日常生活の問題を話し合うカフェタイムもある。県内での開催は初めて。  
 15日、沖縄タイムスを訪れた県地域統括相談支援センターの上原弘美さん=写真右=は「治療にお金がかかるがん患者

にとって、就労は重要な問題。患者会の枠を超えて当事者同士が語り合う機会が少なかったので、患者や家族だけでなく関心のある多くの人に参加してほしい」と呼び掛けた。  
 参加無料。問い合わせは県地域統括相談支援センター、電話098(942)3407。  
**18H FEC「お笑い劇場」**  
 テンプスホール  
 演芸集団FECの「お笑い劇場」が18日午後7時から、那覇市のテンプスホールである。  
 O-1(オーワン)グランプリ

琉球新報1月19日(日)掲載

**がん体験者や家族ら 語り合うカフェ開催**  
 きょう、でだこホール  
 がんになった後の暮らしを学び、語り合う「ご当地カフェ in 沖縄」(主催・県地域統括相談支援センター、国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部)が19日、浦添市でだこホール市民交流室で開かれる。入場無料。がん体験者や家族、医療者らが集まり、お茶を飲みながら互いの悩みや意見を交わし、新たな支援の方法を考える。  
 第1部では国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部の高橋都部長が、がん患者と就労をテーマに講演する。第2部では「沖縄における働くがん患者の現状」と題し、行政

「ご当地カフェ in 沖縄」をP.R.する県地域統括相談支援センターの上原弘美さん(左)と梶原香さん=15日、那覇市天久の琉球新報社

・医療関係者が報告する。参加者が小グループに分かれて意見交換するカフェタイムを設ける。  
 県地域統括相談支援センターの上原弘美さんは「多くの方が意見を交わすことが新たな支援につながる」と参加を呼び掛けた。問い合わせは同センター香098(942)3407。

■事後記事

沖縄タイムス1月22日(水)掲載

**職場と医師連携重要**  
**がん患者の就労議論**

がん患者の5年生存率が9割を超え、がんが治る病気として認識されつつある。しかし、がん患者の就労問題は依然として課題となっている。職場と医師の連携が重要とされている。がん患者の就労支援には、職場と医師の連携が不可欠である。がん患者の就労支援には、職場と医師の連携が不可欠である。がん患者の就労支援には、職場と医師の連携が不可欠である。

がん患者の就労支援には、職場と医師の連携が不可欠である。がん患者の就労支援には、職場と医師の連携が不可欠である。がん患者の就労支援には、職場と医師の連携が不可欠である。

琉球新報1月28日(火)掲載

**◆ご当地カフェ**  
**がんとの付き合い方**

がんになった後の暮らしを学ぶ・語るイベント「ご当地カフェ in 沖縄」(主催・県地域統括相談支援センター、国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部長の高橋都さんが「死に直結する病気ではなく、長く付き合う慢性病として、がんを捉える必要がある」と語った。  
 参加者は六つのグループに分かれ、1時間半にわたって自分のようなことを知りたいか? 周りの人に何を知ってもらいたいのか? について話し合った。  
 がん体験者からは「治療のため、仕事を休まざるを得ず、医療費、生活費をどこから捻出するか大変」「自営業で、従業員が自分を含め2人だけだったので迷惑を掛けてしまった」「腫瘍手当の申請など、どんな制度がありどこに相談すればいいのかわからず困った」などの声が出された。  
 企業の立場からは「いつからいつまで休むのか、治療期間を知りたい」「休業中の雇用について、育児休業のような法的な支援がないと中小企業は厳しい」という意見が上がった。  
 「ご当地カフェ」は、沖縄を皮切りに、今後全国各地で開催する予定という。